

此度備中國為後詰近日彼國可為出馬依之先
隊之銘々先自我至彼地可任羽柴筑前守指圖
者也

天正十年五月廿一日 信長

筒井 順慶 細川與一郎

池田勝三郎 中川瀨兵衛

高山 右近 明智日向守

蜂屋 兵庫 堀 久太郎

一書を記して頃達したるに。いささ懐怒の堪ざる明智が臣家傳とを
を視て大に瞋り。昨日までハ明智羽柴と同格ゆして各一方の大將あるに
遠次ふらざりて小舟の列ふ連絡秀吉が指揮をうけよと云言語に施さる

洵書なり。浩る恥辱を受ながら何ぞ出勢しやと云人も。能令後意の百
遭ありとも所出馬決して之用かりと聲を放ちて怒りけまども。是考世も

いむむと云く。奉書を添く廻したり。時は蘭丸廻文の滞りなく返るを看
て預て明智と不和なりと云ふ。巴潜る公へ言訟まじく。遠遭明智先秀一申

國加勢の命河色と云。稗史せざりて所奉をせし。内心の政企量かど。得と
所賢慮まじく。中と云し。言状を右大臣。後又先秀が事にかい。これ

工更を奉じたり。青本共熱を言せられ。其方の勢が方へ使ひ。那般に言を
べしと命せを奉てそのまふ明智が鏡に到りたり。日向此郎は君の親使と所

よりえ。これ小事はあはとそ。主従免於事ながら。公あちおまじ。後使を遣へ奉
く上座を侍り。青本共熱威儀を整へ。君命餘れ義にゆる。遠遭中國不

出勢せられ武功を拙人を斬平けり。出雲石見を揚る。所後意なりと云